

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2016～2019

課題番号：16KT0155

研究課題名(和文) 紛争の原初的かたちとしての対人葛藤の発生と対応への人間発達論的アプローチ

研究課題名(英文) Interpersonal conflict as a primordial form of larger conflict: An approach from human development

研究代表者

眞 千賀子 (TOMA, Chikako)

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号：60311148

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：紛争の原初的形態として対人葛藤に着目し、保育所を社会のマイクロコズムと捉えて、発達初期における対人葛藤の発生・展開の特徴を把握し、保育実践との関係を検討することを目的として、保育所の日常生活場面の自然観察的ビデオデータを縦断的に収集・分析した。事前に対象や時間を定めて観察するという従来の方法論的制約を超え、より発見的な観察と分析の手法を用いることにより、「連なり」として発生する葛藤や、他者への関心と不可分に展開する葛藤などが見出された。また葛藤の発生・展開の特徴には保育所の長年に渡る異年齢をベースとした保育実践の特徴と呼応するものがあり、葛藤とコミュニティ実践の関係を示唆する結果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、紛争の原初的かたちとして発達初期の対人葛藤に着目し、社会のマイクロコズムとしての保育所における日常生活場面の縦断的ビデオ記録の収集と分析を通して、紛争の発達心理学的理解への端緒となる知見を提供することができた。本研究で得られたような日常生活場面で生じる発達初期の対人葛藤の自然観察的ビデオデータは、日英どの言語の先行研究にも見出すことができなかった。対立が悪質な紛争へと深刻化するのを回避する方途を探るのに資するような多角的分析にもとづく研究を、今後も重ねることを可能にする厚みのある自然観察的データを蓄積することができたのは、本研究の学術及び社会的意義のひとつである。

研究成果の概要(英文)：This study focused on interpersonal conflict as a primordial form of conflict and considered a nursery school as a microcosm of a society. Naturalistic video-data was collected longitudinally at a nursery school in order to understand the characteristics of interpersonal conflict in the early stage of human development. Heuristic analysis used in this study was effective in discovering the types of conflict which were not focused in previous studies in which observation was made on predetermined target and/or by time sampling method: Chain like series of conflicts were observed to be generated one after another unwittingly; Persistent conflicts seemingly over the toys were observed to be initiated along with the interest in the person. Furthermore, characteristic patterns of conflict reflected the multi-age-based practice the nursery school had carried out over a decade.

研究分野：発達心理学 臨床発達心理学 文化心理学

キーワード：紛争 対人葛藤 自然観察 保育 発達 いざこざ トラブル 文化

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

国家間の対立から地域コミュニティや家庭内のいざこざまで、あらゆる紛争は人と人とのかわりのあり方にその基盤がある。人を離れて紛争はなく、紛争のない状態は人類史上一度も実現していない。テクノロジーの発展がかえって紛争の形を複雑化し、予期せぬ形で人々の生活を脅かすようになったことを踏まえ、あらためて、紛争が極めて人間的な営為であることを直視したアプローチが必要な状況にあると考えた。

紛争についての研究は、これまで主に国際関係論、政治学、政策論、国際法学、社会学などの社会科学領域で取り組まれてきた。一方、心理学では社会的葛藤 (social conflict) や対人葛藤 (interpersonal conflict) というキーワードでの研究はあっても、紛争という水準での問題と関連づけた視点から掘り下げられてきたとは言えない状況であった。特設分野「紛争研究」の問題提起は、従来の枠組みを超えた多様な学問領域からのアプローチを呼びかけており、発達心理学的切り口から紛争問題を考える発想をも刺激する画期的なものになっていた。特に、紛争の最も原初的形態としての対人葛藤や衝突が、人の発達の過程でどのように発生し展開していくのかということについて、日常生活場面の自然観察を通して把握することは、紛争の人間発達の基盤への理解につながる可能性がある。さらに、そのような葛藤の発生・展開が、日々の生活を構成する日常実践システムのありようとどのように関係しているかを検討することができれば、葛藤の性質を理解した上で、葛藤が紛争へと深刻化する予兆を把握し、悪質化を未然に防ぐ知恵を蓄積するという重要な課題に対して発達心理学的研究ならではの貢献が期待できると考えた。

そこで、本研究では、人間社会のマイクロコズムとしての保育所をフィールドとした研究を展開することにより、人類的課題である紛争問題への発達論的なアプローチを試みることを提案した。対象となる保育所では、長年に渡り、本研究代表者と協働して、大人も子どもも互いに育み合う「村」のように機能する保育実践を試みていた。年齢別クラス編成による個別担任制の保育から、異年齢での生活を基本に据えたゆるやかな担任制による保育へと日常の保育実践システムを変えていく過程で、対人葛藤やトラブルが、大きく減少しただけでなく質的にも変化したことは、本研究代表者と多くの保育士が共に認識していたところであり、体系的な分析が待たれる重要なテーマのひとつとなっていた。

### 2. 研究の目的

保育所を社会のマイクロコズムと捉えて、(A) 保育の日常実践のありようと対人葛藤の発生・展開の特徴はどのようにかかわっているか、(B) 発達論的には紛争の原初的形態であると考えられる対人葛藤は人の発達過程でどのように発生・展開するのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 生活場面の自然観察的ビデオ記録の収集

紛争の原初的かたちとしての発達初期の対人葛藤の発生と特徴を理解するには、一日を通じた日常生活場面の縦断的観察が重要となるが、観察法により対人葛藤にアプローチした先行研究の方法論的レビューでは日常生活場面の直接観察 (ビデオ記録を含む) による研究論文数は極めて少なく、また一日を通じた日常生活場面のビデオ記録による研究はみつからなかった。そこで、本研究の目的に応じたビデオ記録の手法を工夫する必要があった。

保育室での自然な生活の流れの中で葛藤場面を同定するためのビデオ記録の取り方について試行を重ねた結果、子どもたちの動きを含めて収録可能なアングルと撮影領域を備えた複数の固定カメラによる長時間の連続撮影が有効であることがわかった。さらに手持ちのビデオカメラを加えることで、葛藤場面の詳細な分析を可能にする水準での録画が可能となった。

H29年度に保育所で未満児組 (概ね3歳未満の乳幼児) を中心に、一日を通じた生活場面の自然観察的ビデオデータを6月、11月、3月の3期に渡って収集し、これを本研究の基盤データとした。H30年度、H31年度はその後の縦断的変化が把握できるよう補助的な役割としてのビデオデータの収集を行った。

さらに、異年齢保育を軸とした保育実践の特徴を把握するため、保育所全体の日常的保育場面と運動会や発表会などの行事への取り組みについてのフィールドワークを行い、ビデオ記録を収集した。

#### (2) ビデオ記録の分析による葛藤の同定と記述

一日を通じた生活の中のどのような場面で、誰との間に、どのような葛藤が生じるかを把握するために自然観察的ビデオデータを多角的に分析する手法の開発を行った。

はじめに、膨大なビデオデータを分析の目的に応じて活用可能な状態にするために、日時、場所、活動内容、対象者などの基本的な情報を入力したデータベースを作成した。次にこのデータベースを用いてデジタル映像データを通常速度で観察し、葛藤と思われる現象がみられたら、巻き戻して繰り返し確認、また必要に応じて別角度のカメラ映像で確認するという手法で葛藤の同定を行った。検討を要する事例については、3人の分析者での協議を経て判断した。さらに同定された葛藤についてはその状況が文脈を含めて理解できるようなエスノグラフィックなエピソードの記述 (Rogoff et al., 1993 参照) を行った。この葛藤エピソードの記述とデータベ

すは、作成に膨大な労力を要するが、さまざまな角度から対人葛藤の発生と展開を分析するベースとなるものである。次項で報告する研究成果は、葛藤エピソードのデータベースと記述をもとに必要に応じてさらなる分析を加えることにより得られたものである。

#### 4. 研究成果

##### (1) 保育実践の特徴

本研究を実施した保育所では、形成的フィールドワーク（當眞, 2004, 2006）という実践形成的研究手法による本研究代表者との協働により、異年齢保育の導入を軸として子どもも大人（保育士や親）も互いに育み合う実践が営まれるコミュニティを育んでいくプロジェクトを展開してきた。これにより、0歳～6歳までの異年齢の子どもたちの間で育み合う関係性が育ち、未満児でも年長者が自発的に年少者をケアする姿（例：移動の際に手を引いてエスコートする、年少者から順におもちゃを取る、食事の介助をする）が日常的に見られるようになっていた。また、未満児の中で年長クラスの2歳児たちは、お食事やおやつの前のご挨拶を仕切るなど、集団をリードする役割も自主的に担うようになっていた。異年齢の関係性の中で自らの立ち位置に応じた役割を担いながら、ケアされる体験とケアする体験を重ね、徐々に頼られる存在へと成長していくことを支える特徴を備えた保育実践が保育所全体で展開していた。

##### (2) 保育所の一日を通した自然観察による未満児の対人葛藤の把握

特別な行事等のない未満児クラスの1日（8時50分～18時15分 総撮影時間数は479分 2017年6月）を対象として、どのような場面で、誰との間に、どのような葛藤が生じているかを把握することを目的とした分析を行った。未満児の総児童数は33人で主に月齢によって4つのクラスに分けられていた。各クラスの児童数と月齢の中央値は年少から順に、I組4人、10ヶ月；II組7人、19ヶ月；III組12人、26ヶ月；IV組11人、30ヶ月であった。

分析の結果、1日を通して40件の単発的な対人葛藤が同定された。一日を構成する7つの活動における葛藤の生起頻度を比較したところ、「遊びの時間」に生じた葛藤が31件と全体の78%を占め、次いで「給食・食後片づけ」が4件（10%）、「延長保育」が2件（5%）、他3件であった。総撮影時間に占める「遊びの時間」の割合は38%であったことを考慮すると、他の活動に比べて「遊びの時間」は対人葛藤が最も生じやすい活動であると考えられた。

また、全葛藤40件のうち、IV組の男児Aに起因する葛藤が15件と全体の38%を占め、次に多いIII組の男児Bの5件の3倍に達していた。

次に「遊びの時間」に限定して、葛藤のきっかけとなる行為が、IからIVの組によってマーキングされた年長性（seniority）によって違いがあるかを分析した。その結果、全体の85%の葛藤が、IV組とIII組（IV同士・III同士・IVとIIIの間）によるもので、中でも同じクラスの児童間での葛藤が多かった。全児童33名のうち、年下の児童との葛藤のきっかけを作ったのは、IV組の男児Aと女児Cの2人だけであった。そのうち、男児Aがきっかけとなった葛藤は13件であり、女児Cは2件であった。

一日を通して未満児の自然活動場面を観察・分析することにより、活動内容と葛藤の起きやすさには関係があるということ、また、1日の中で生じてくる葛藤の中には、個人の特徴が大きく関与するものが含まれることがあるということが明らかになった。さらに、概して年上の子が年下の子に対して葛藤のきっかけを作ることは極めて稀であった。本研究の対象年齢がほぼ3歳未満であったことを考慮すると、対人葛藤の発生に年少者への配慮がうかがえるパターンがこの時期からみられることは注目に値する。また、葛藤を起こすことの多かった男児Aは他者とのコミュニケーションに困難があり、この時点では、全葛藤に占める割合、葛藤の対象共に同年齢の他の児童の葛藤と大きく異なる特徴がみられたが、年少者を含め周りの子どもたちはAの行為に対抗的に反応することは極めて少なかった。その後の縦断的観察からは、男児Aを起点とする葛藤エピソードが減少し、他者とのかかわりを求め楽しむエピソードが増えていく様子が見られた。これらの結果は、本保育所の異年齢をベースとした日常的な保育実践の特徴と呼応するものであり、対人葛藤と日常実践の関係性を考える上で興味深い結果であると考えられる。

##### (3) 保育所の生活場面の持続的観察を通した対人葛藤へのアプローチ：未満児の自由遊びにおける対人葛藤の連なりを捉える

日本における発達初期の子どもたちの対人葛藤に関する研究で用いられることの多い、実験的な設定場面の観察や、対象者を限定したタイムサンプリングによる観察では、事前に設定した定義にもとづく葛藤を効率よく把握することはできるが、想定外の葛藤のタイプを発見することは難しくなる。日常生活の中で生じる葛藤の中には、そうした従来の手法では見落とされてしまっているものも含まれている可能性がある。そこで、これまでの分析を通して、保育所の1日の中で最も対人葛藤が生じやすい活動であることが明らかになった「遊びの時間」のビデオ記録（16時54分～18時5分、総撮影時間数71分）を対象として分析を行った。

その結果、未満児の対人葛藤には、比較的相互に独立して起きる単発的な葛藤だけではなく、何らかの理由で次々とある種の関連性をもって葛藤が引き起こされる事態が含まれていることが分かった。先行研究では把握されにくかったタイプの葛藤の1例として、ここでは「へび紐」と呼ばれる玩具を巡って男児D（2歳6か月）と他児との間に次々と生じた一連の葛藤を取り上げ

る。へび紐は、中に綿が詰まった布製の細長い筒状の玩具で、両端にスナップボタンがあって、繋げて遊べるようになっている。さまざまな繋ぎ方ができることから人気のある玩具である。

感情的な衝突が顕著なものから、不満を表現する程度のものであらゆるタイプの葛藤を含めると、約15分に渡り、「へび紐」を巡ってDと8人の児童と間で計12回の衝突が起きていた。これは、0～3歳までの未満児が自由におもちゃで遊んでいる畳の部屋で、Dがへび紐を持って移動しながら思いのままに遊びを展開したことで、その場に居る他児との間に衝突が起きやすい状況が生まれたことによるもので、ある種の関連を持った葛藤の連なりとして捉えることができる。

同じ場面をタイムサンプリング法で観察した場合には、対象児童の設定や葛藤の定義によっては、これらの葛藤は個別のものとしてカウントされたり、見逃されたりしていた可能性がある。本研究は、日常の生活場面で起きている葛藤を理解するには、対象や時間を事前に設定するという方法論的制約を超えた、より発見的な観察と分析の手法が必要であることを示している。

(4) 発達初期の対人葛藤と他者への関心：ある20ヶ月児の自由遊びでの対人葛藤パターンから汲み取れること

保育所の未満児のフロアで1日の中で最も対人葛藤が生じやすい活動である「遊びの時間」のビデオ記録(60分)を用い、この時間帯に30分以上滞在した11～37ヶ月の20人のうち2歳未満の子どもたちの中で対人葛藤エピソードが特に多かった20ヶ月男児Hを対象として対人葛藤エピソードを同定しその中の「いざこざ」に分類される葛藤を対象として分析を行った。本研究では「いざこざ」を「ある子の行為(発言を含む)に対して他の子が不快や抵抗を示してもその行為が止まない事態において、不快感や不本意感が表出され、たとえ短くても強く執着する、持続して嫌がる、などの特徴がみられる葛藤エピソード」と定義した。

Hは60分の間に12回のいざこざがあり、そのうち8回はHの行為がいざこざのきっかけとなっていた。また、この8回のうち、6回はおもちゃが介在しており、先行研究の多くでは「モノの取り合い」として分類される特徴を含んでいた。しかし、エピソードを丁寧に観ていくと、単純に「モノの取り合い」として捉えるだけでは汲み取り切れない特徴があることがわかった。

例えば、I(月齢28ヶ月、男児)とのあるエピソードの中で、Hはミカンを皿の上に置く、取る、皿を渡すまいと握るなどの行為のたびにIの反応をじっと見ていた。この特徴はHに特に顕著で、他の葛藤エピソードでもほぼ一貫して見られていた。また、次々といざこざが展開し複雑化することもHがかかわるエピソードで度々見られる特徴であった。モノを介した葛藤ではあるが、モノの所有や使用に限らず、あるいはそれ以上に、相手の反応を引き出すことに関心が向いているようであり、いざこざを通して他者との多少スリリングなかかわりを面白がっているような様子が見られた。この結果は発達初期の対人葛藤が他者への関心と不可分に展開することがある可能性を示唆しており、その理解には日常生活場面のビデオデータを用いたエピソードの濃やかな分析が必要かつ有効であることを示している。

<引用文献>

Rogoff, B., Mistry, J., Goncu, A., & Mosier, C. (1993). Guided participation in cultural activity by toddlers and caregivers. *Monographs of the Society for Research in Child Development*. Serial No. 236, Vol. 58, No. 8.

當眞千賀子 (2004) 問いに導かれて方法が生まれるとき — 形成的フィールドワークという方法『臨床心理学』vol. 4, no. 6, 771-782.

當眞千賀子 (2006) 形成的フィールドワークという方法～問いに応える方法の工夫 吉田寿夫 (編) 心理学研究法のあたらしいかたち (pp. 170-194) 誠心書房

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 當眞千賀子・日尾野愛
2. 発表標題 発達初期の対人葛藤と他者への関心：ある20ヶ月児の自由遊びでの対人葛藤パターンから汲み取れること
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 當眞千賀子・日尾野愛
2. 発表標題 生活場面の持続的観察を通じた対人葛藤へのアプローチ：保育所における未満児の自由遊びでの対人葛藤の連なりを捉える
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 當眞千賀子・日尾野愛
2. 発表標題 保育所の一日を通じた自然観察による未満児の対人葛藤の把握
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 當眞千賀子・日尾野愛
2. 発表標題 生活場面のビデオデータを活用した3歳未満の対人葛藤理解のための方法論的検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第28回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	日尾野 愛  (HIBINO Ai)	九州大学・人間環境学府・大学院生(博士後期課程)  (17102)	